

私の小さな幸せ

桜川市立岩瀬東中学校

三年

大和田

愛子

私のおいしいちゃんとおばあちゃんは農家を
している。お米や、野菜、果物まで育ててい
る。だから毎日のご飯には、ほぼ自分の家の
野菜などが使われている。

そして私の家は山のみもとのみもとだと言
うくらいに山に近い。だから学校からの帰り
道はどの道も上り坂からは逃れられない。ほ
いめて私の家に来る友達にはいつも驚かれる。

また、家の裏は、大きな田んぼが三段あり
また別に小学校の通学路に二つある。山は季
節によってピンク色や赤色に染まり、それを
見にくる観光客で溢れる。まだ水を張ってい
る時期に山に続く道から見える私の家の田ん
ぼを

「あれは池なんですか？」
と聞かれたこともある。そのくらい大きいの
だ。

そんな中で育てるお米は私が一番好きと言

うくらいい好きだ。六月くらいに行き田植えは
 いつもおじいちゃんが運転する田植え機に小
 さい頃から乗せてもらっていた。稲刈りのと
 きは軽トラツワにコンテナを乗せ、もみ殻を
 積み、お父さんともみすり機がある場所と田
 んぼを行き来していた。そしてびきる新米を
 おじいちゃんが、

「愛子、新米味見してみて。」

と言う。私は小皿にのせ、少し醤油をかけて
 湯気がたつご飯を頬張る瞬間が私は好きだ。

「どりたいい？おいしい？」

と期待をこめて言うおじいちゃんとおばあち
 んの視線を感じる。そして私は

「今年もおいしいよ。」

と言うと二人はほっとしたようにする。これ
 が私の毎年の楽しみだ。

炊飯器がピーとなり、

「ご飯混ぜといて。」

と言われ、ふたを開けるとほのかにお米の匂
 いがする湯気が私の顔を包む。つい私はそれ

を目の当たりにすると誘惑に負け、つまみ食いをしてしまひ、ほかほかのご飯に家でできた青菜をのせて食べる。これは私の目課だ。そして小さい頃からお手伝いをしていたおかげで私はお米がすきになった。私の家のお米は格段に美味しい。例えば旅行先のホテルで食べるブランド米や友達の家で食べるお米より、家で食べるお米の方がなんだか独占して食べているような特別感がある。また、友達からの評判がすごくいい。特にお母さんや

おばあちゃんやがばと作るおにぎりだ。

「愛子ちゃん家のおにぎりなんかすごく美味

しいよ。

と言われた時は本当に嬉しくて少し照れくさい。私の好きなお米を認めてくれた気持ちになる。私の家で作るお米はみんなに自慢できるとくらい自信をもっておいしいといえる。

また、私には二歳差の兄がいる。高校で部活をやっている兄は体づくりをしなくてはならない。だからわたしはいつも大きな茶碗が

ら溢れるくらいにご飯をよそる。そして兄と炊飯器に残ったご飯を全部食べ尽くす日もある。そしてたらいつもおいちゃんとおばあちゃんが嬉しそりにする。その瞬間が私もすごく嬉しい。つまり私の家のご飯には家族を笑顔にする力がある。

部活の試合で合間に食べるおにぎりがどれだけエネルギーになっっているのか。毎日好きな量だけお米を食べれることはどれだけ幸せか。当たり前の上りで当たり前ではないと思

う。
今日の夜ご飯も明日の朝ご飯もまたその次もお米を食べれる日常がすごく幸せだ。私の家が作るお米は世界一おいしいと自信を持って言える。

今日の夜ご飯はなにかな。今日はお米と何を一緒に食べようかな。そう考えられる日常をこれから大切にしていきたい。家でご飯を食べることが私の一つの幸せであり、楽しみだ。